

『陸地測量部沿革誌（稿本）』の外邦測量記事が示唆する『陸地測量部沿革誌』の編集過程

『陸地測量部沿革誌（稿本）』と題する書物の複写がアジア歴史資料センターから公開されている（レファレンスコード：C14020003300; C14020004200）。謄写版で印刷された書物の複写本で、「前編」と「後編」の2冊からなり、原本は「川嶋史料（東京）」とされている。この付属資料は、原本の提供者を川嶋紀子氏とし、小菅智淵（1832—1888年）の「令孫」と注記する。小菅は陸軍で初期の近代測量を推進し、初代の陸地測量部長に就任した軍人で、日本の地図作製史の重要人物である。

こうした『陸地測量部沿革誌（稿本）』の文章を検討したところ、「後編」は筆者が2019年に古書店より購入した『陸地測量部沿革史（草案）』（自明治二十一年五月至基本測図完了、陸地測量部時代）と同じものであることがわかった。この『草案』は明らかにリプリントであることがわかる書物で、表紙に印刷されたタイトルも他に例がなく、もとのタイトルは『陸地測量部沿革誌（稿本）』であった可能性が高い。

これから、もう一方の『陸地測量部沿革誌（稿本）』（前編）も、古書としてセットで購入した『陸地測量部沿革史（草案）』（自明治初年至明治二十一年五月、第五課及測量課時代／測量局時代）と同じであると予想したが、同じ時期をカバーしてはいるものの、原本ができたと考えられる時期は、『草案』のそれより新しく、冒頭に「緒言」が加わり、「凡例」が書き換えられるなど変化がみられる。また『草案』には、文章を訂正する書き込みが見られ、そうした作業のあとが見られない『稿本』（前編）と対照的である。

2冊よりなる『草案』には、いずれにも刊記がないが、1970年頃にリプリントされたようで、近代地図の研究者にはすでに知られている。清水靖夫氏によれば、原本の旧蔵者は陸地測量部・地理調査所に長く務め、地図史についていくつもの著書がある高木菊三郎であったという。ただし『草案』の引用は、清水氏や佐藤侑氏によるわずかな例を確認しているだけで、ひろく参照されている資料とはなっていない。刊記がないだけでなく、記載内容を確認すること容易でないため、多くの方たちは、存在を知っていても、立ち入った検討を避けてきたと推測される。

しかし小菅智淵の子孫が所持してきた『稿本』（後編）と、高木菊三郎旧蔵本の『草案』の一方が一致するという点は注目すべきことで、筆者はその内容を1922年刊の『陸地測量部沿革誌』（「正篇」、続刊の「終篇」、さらに高木編の「終末篇」と区別してこう言われる）と比較対照してみて、この『稿本』が陸地測量部で作製されたもので、『正篇』の編集に大きな意義をもったことを確信することになった。またこのことを、これまで『外邦兵要地図整備誌』（1992年）、『外邦測量沿革史 草稿』（2008, 2009年）、『陸地測量部沿革誌』（正篇、2013年）と、重要な近代地図関係資料のリプリントを刊行してきた不二出版に伝えたところ、復刻本が実現することとなり、解説文を執筆することになった。この復刻本では、『稿本』の記載と『正篇』の記載とを比較しやすいように、工夫を凝らしている。以下では、『稿本』の示す外邦測量関連記事を中心に、この解説文で触れられなかった問題について考えてみたい。

『稿本』の大きな特色は、その後編に少なからぬ外邦測量関係記事を掲載する点である。日清戦争の際に派遣された、多くの測量要員よりなる「臨時測図部」以降、少人数の測量技術者による外邦測量についても短いながら要点を示す記事が見られる。もちろんこの多くは、筆者らが他の資料からすでに確認していたが、なかには1899年に福建省に派遣された少数の技術者の場合のように、『稿本』（後編）ではじめて知った例もある。

他方『正篇』では、こうした外邦測量関係の記事は、ほとんど削除されてしまっている。これはその冒

頭にみられる、刊行当時の参謀総長、上原勇作による「叙」の内容と整合的である。上原は冒頭で、国家の文武の諸政には「地経」（地図）によらないものがほとんどないとしつつ、その善し悪しは一国の文明の程度を示していると格調高く述べる。それにつづく文章は近代国家日本における地図作製の発展に関するもので、末尾にはそれに係わる後進の人々は、先輩の苦勞を知り、今の學術器械に安住せず、大成を図れば、「我カ國ノ文華ハ燦然タル光輝ヲ放タン」と結んでいる。近代国家には近代地図が必要であり、不断の技術革新が必要というわけである。この文章では、戦争や植民地統治をつよく意識しておこなわれた外邦測量が全く視野のなかに含まれていない。

これに呼応するように、『正篇』の「凡例」では「六、外邦測圖に關シテハ別冊トシテ其ノ沿革ヲ編纂セリ」として、別に書物を作るとする。この別冊については、これまで探索を重ねているが、その引用例がみつからず、原稿が作成されたことすら確認できない。それらしいものとしては、わずかに鳥居鑛太郎（修技所第7期卒）の回想に登場する、陸地測量部地形科編纂の『外邦測圖ニ係ハル歴史』という冊子を知っただけである（大田寛之『測量隨録 原稿』とその内容について（2）「外邦図研究ニューズレター13、29-32頁）。陸地測量部で地形科は、外邦測量に最も多くの技術者を派遣し、こうした冊子を作製した背景が想像できる。鳥居の回想にみえるこの冊子からの書き抜きから、日清戦争時に編成された臨時測図部から日露戦争時編成の臨時測図部までを記載していたことがわかるが、大まかにおもな行動の時期を示すだけである。また小規模な派遣の場合は参加者全員の氏名を示すが、大規模な派遣の場合は付表として名簿があったとする。またこれから、『外邦測圖ニ係ハル歴史』は、組織内部用であったと推定される。

以上に関連して留意されるのは、まず上原勇作が日清戦争で第一軍の参謀、日露戦争で第四軍の参謀長を務め、地図については詳しい知識を持っていたことである。また参謀総長としての在任期間中（1915～1923年）は、秘密測量の計画などについて報告を受ける立場にあった（アジア歴史資料センター資料：C13110023600など）。秘密測量に際してトラブルが発生し、現地の官憲が感知した場合などには、付近の領事館の報告をもとにする外務省からの連絡に接する場合もあったと考えられる（アジア歴史資料センター資料「軍事調査及報告雑件／外国へ陸地測量員派遣ノ件（南清・北清・滿蒙・西比利亞）」レファレンスコード：B07090486700; B07090487100; B07090487800参照）。国際紛争につながりかねない外邦測量に対して、こうしたトラブルの処理を担当した外務省が反感を強めていったことも承知していたはずである。

このようにみえてくると、『正篇』の序文が示すような地図作製の「表」ともいべき側面だけでなく、外邦測量、とくに秘密測量という「裏」の側面について、上原は参謀総長の立場から俯瞰的に眺めることができたことに疑問の余地はない。『稿本』の内容を知っていたかどうかは別にしても、『正篇』がもっぱら表の世界だけを示すことについて、上原は承知の上で序文を執筆したわけである。

『稿本』から外邦測量の記事を削除して、『正篇』が編集されるという編集方針の変更の背景はまだわかっていない。しかし『稿本』が「脱稿」したとされる1916（大正5）年には、すでに参謀総長に就任していたことを考えると、あるいは上記の事情を熟知していた上原がこのような指示を出して、序文を執筆した可能性も考えざるを得ない。近代国家と近代地図作製を強く結びつけ、「表」の世界を礼賛するこの序文は、一読すると陸地測量部からの依頼を受けて、その上部機関の長として執筆したと考えられやすいが、そうした虚構ともいえる立場に基づく『陸地測量部沿革誌』を公刊するには、『稿本』の大胆な変更が不可欠であり、これを指示できたのは、どのような役職のどのような人物であったか気にかかるところである。

（小林 茂）